

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：20104

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22191

研究課題名(和文) 保育の仲間関係をめぐるクラス替えの実践知に関する研究

研究課題名(英文) Kindergarten teachers use their practical knowledge about class shuffles to develop children's peer relationships

研究代表者

及川 智博(OIKAWA, Tomohiro)

名寄市立大学・保健福祉学部・講師

研究者番号：50879450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、保育者がクラス替えをいかに実施しているのか、その実践知を明らかにすることを目的とした。保育施設3園で面接調査を実施した。分析の結果、以下の仮説モデルが生成された。保育者は【クラス替え実施の有無】を判断した後、2つの検討を行っていた。第1に、小学校区や保育の利用時間等の【クラス編成にかかわる考慮事項】を踏まえたクラス編成である。第2に、幼児が遊びの楽しさに出会っていくための【子どもたちの姿の見とり】に基づく【子どもたちが遊びを楽しむためのクラス編成】である。保育者は両者に関する【バランスの調整】を行っていた。最後に、保育者は【子どもたちを信じる】ことでクラス編成の案を決定していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、「クラス替え」という、これまで何気なく行われてきた実践に埋め込まれた保育者の専門性を言語化した点にある。特に、保護者にとってクラス替えは、我が子がどの他児や保育者と同じクラスになるか、関心を寄せるイベントの1つである。本研究の成果はそのクラス替えが、幼児たちの遊びの充実を目指すという、保育者の教育的意図を背景に進められる専門的な援助の1つであることを見出した。また、それと同時に、本研究の成果はクラス替えを単なる環境移行としてではなく、保育者による専門的援助として捉えるという、幼児期の仲間関係研究をめぐる新たな学術的視野を拓くものである。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated kindergarten teachers' practical knowledge of how to shuffle classes. Teachers in 3 kindergartens were interviewed. As a result, the following hypothesized model emerged. After determining [whether class shuffle], the teachers had two considerations. First, the teachers considered the plans of class shuffle based on [considering the management of childcare and education], such as the elementary school district. Second, [class shuffle for children to enjoy play] based on [observation of children] for young children to encounter the joy of children's play. After that, the teachers [adjust the balance] concerning both. Finally, the teachers decided on the plan of the class shuffle based on [trusting the children].

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児 保育 保育者 仲間関係 実践知 クラス替え 遊び 環境移行

1. 研究開始当初の背景

クラスメイトと共に形成する仲間関係は、日々の遊びや保育を豊かにしてくれる、幼児にとって大切な社会的資源である。先行研究は幼児の仲間関係について、主として以下の2つのアプローチのいずれかを用いることで研究を進めてきた。第1に、幼児の仲間関係の形成には、個々の社会・認知的能力(例えば、コミュニケーション能力や他者の心情を推測する能力)が特に関連すると考えるアプローチである。このアプローチを用いた先行研究は、特に仲間関係の形成に困難を抱えた幼児に注目し、不足している諸能力を把握した上で、その現状を改善するための専門的介入を開発してきた(例えば、佐藤, 2015; Slaughter et al., 2015; Van der Wilt et al., 2018)。第2に、幼児の仲間関係の形成を捉えるには、幼児間の具体的な関わりの蓄積に注目する必要があると考えるアプローチである。このアプローチを用いた先行研究は、例えば「ね～」といった言葉のやりとりや、身体・モノを用いた幼児同士の相互作用に注目し、仲間関係の形成プロセスとその特質を把握しようとしてきた(例えば、無藤, 1997; 砂上, 2007; 高櫻, 2013)。

こうした従来の先行研究のアプローチには、1つの議論の前提がある。それは、幼児が相手を自由に選んで関わりを持っているという前提である(Figure 1)。たしかに、幼児は遊びの好みや波長が合う他児を相手として選び、関わりを継続することで仲間関係を形成しているかもしれない。保育施設の1日を考えれば、遊びの時間だけではなく、設定保育から昼食まで、幼児が活動の多くを共有し関わるその相手となるのは、同じクラスの他児である。

しかし、ここで考慮に入れなければならないのは、複数学級を有する保育施設におけるクラスのメンバーは、決してランダムに編成されているわけではなく、保育者の教育的意図を背景に振り分けられている点である。特に、幼児たちの様子が概ねわかった上で行われる、進級時のクラス替えが実施されている場合は尚更であろう。つまり、保育者にとって仲間関係をめぐる援助は、日々の保育や遊びのなかだけではなく、むしろ年度開始以前のクラス替えからすでに始まっている。そして、幼児たちが主として仲間関係を形成していく相手は、そうした教育的意図が背景にあるクラス替えにより割り振られた他児たちなのである。

従来、仲間関係とクラス替えとの関係については、“幼児が新しいクラスにどのように適応し、新たな仲間関係を形成していくか”といった、環境移行とそれに伴う再適応という視点から研究が進められてきた(例えば、小島, 2008; 桃枝, 2021)。こうした視点からクラス替えを捉えると、幼児たちにとってクラス替えは、仲間関係上の再適応が求められる、一定の負荷がかかる機会に他ならない。しかし、『幼稚園教育要領解説』等のガイドラインに記載がなくとも(文部科学省, 2018)、複数学級を有する保育施設でクラス替えが実施されていることを鑑みれば、それは保育を進める上で必要な実践の1つであることが予想される。このように、保育におけるクラス替えを、仲間関係をめぐる積極的な援助の1つとして捉え、その専門性を把握しようとした実証的研究は管見の限り見当たらない。

2. 研究の目的

以上の議論より本研究は、保育におけるクラス替えを、幼児に仲間関係上の再適応を求める機会としてではなく、むしろ保育者による、仲間関係の発達へ向けた積極的援助の1つとして捉える。その上で、保育者はクラス替えを通して、新年度のクラスをいかに議論・編成しているのか、その実践知を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者および資料の収集方法

本調査は、札幌市およびその近郊に所在する私立認定こども園2園(A園, B園)、および私立幼稚園1園(C園)を対象に実施された。協力園は、特殊な教育プログラムを導入していない、遊びを中心とした保育を行っていることを基準に選定された。3園はすべて、同年齢による横割りのクラス編成を行っていた。なお、協力園の法人は全て異なる。

本調査では以上の協力園において、新年度のクラス編成が決定した段階で、そのクラス替えの素案を決定した保育者を対象とした面接調査により資料を収集した。特に、クラス替えの素案決定に携わった保育者が各園に複数名いることが想定されたことから、本調査では主としてフォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGI)により資料を収集することとした。面接はすべ

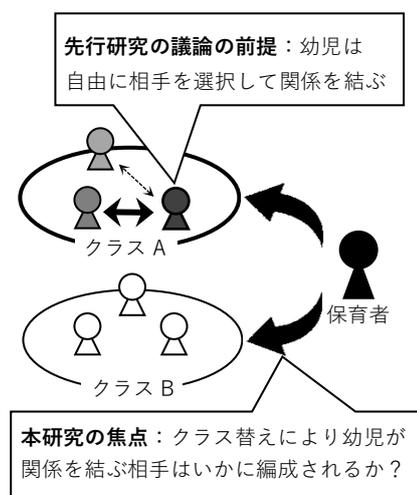


Figure 1 先行研究と本研究との関係図

Table 1 調査の概要

調査協力園（仮名）	調査対象となったクラス替えの内容	新クラスの素案を決めた保育者
私立A認定こども園	①年少(3クラス) → 新年中(3クラス) ②年中(3クラス) → 新年長(3クラス)	①年少クラス担任3名・副担任3名 ※調査時、副担任1名欠席 ②年中クラス担任3名
私立B認定こども園	①年少(3クラス) → 新年中(2クラス)	①年少クラス担任3名・副担任3名 (調査時1名欠席) ②年中クラス担任3名
私立C幼稚園	①年少(2クラス) → 新年中(2クラス) ②2歳児(1クラス) + 新入園児 → 新年少(2クラス)	①・②主任教諭1名

て研究代表者が行った。結果的に、C園のみ主任教諭1名が全クラスの素案を決定していたことから、1対1での面接となった。その他、A・B園については、複数名でクラス替えの素案を決定していたことから、その保育者たちを協力者としたFGIにより調査を行った。調査協力園と、伺ったクラス替えの内容、および調査協力者（新年度クラスの素案を決めた保育者）をTable 1に示す。

なお、研究開始当初はクラス替え前後における幼児の観察調査等も計画していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大収束の目処が立たず、保育施設への継続的調査が困難な状況が続いた。そのため、本研究では上記の面接調査を充実させることにより、目的の達成を図った。

(2) 面接手続き

面接でははじめに、①園におけるクラス替えのタイミングと決定フロー、②クラス替えをする際の基本的な意図とねらい、③今年度の幼児たちの課題と次年度への期待の3点を尋ねた。その後、④新年度のクラス替えを決定していったプロセスについて、幼児たちを割り振った順番で再現してもらい、そのように割り振った理由を逐次尋ねた。最後に、⑤新年度における当該学年の保育に関する期待や抱負を伺った。その上で本研究は、目的との整合性から③・④の語り、および①・②・⑤のうち特に当該年度のクラス替えと関わりが深いと考えられる語りを分析に使用した。記録はICレコーダーと、発話者が特定できるようにビデオカメラを用いたほか、面接進行の補助として筆記記録も同時に行った。また、質問④の際には、想起と語りの円滑化のために、補助用具として付箋等を用いたほか、その作業の様子はタブレット機器を用いて撮影した。

(3) 倫理的配慮

調査依頼時および面接前に、調査への参加は任意であり、拒否や中止、また録音と撮影の中断・停止が可能であること、またその際にも一切の不利益がないことを説明した。次に、録音・撮影・筆記記録は厳重に管理されるほか、記録の利用に際しては個人が特定されないように十分配慮することを説明した。以上の説明に対して同意を得られた協力者にのみ、本調査は実施された。なお、A園における保育者の欠席1名は、当日の欠勤によるものである。

(4) 分析手続き

得られた語りは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析された（木下，2020）。

4. 研究成果

分析の結果、保育者たちの語りからは、6つのカテゴリーと23のサブカテゴリーが生成された。以下、サブカテゴリー（語りを内容の類似点に注目してまとめたもの）の名称は〈 〉で、より大きな意味の単位であるカテゴリー（意味内容の近いサブカテゴリー同士のまとまり）の名称は【 】で括って表記する。なお、その他の分析方法および各用語の詳細については、木下(2020)などを参照されたい。

まず、保育者たちは【クラス替え実施の有無】すなわち当該年度におけるクラス替えの必要性について、各園の教育課程や過去の経験を参照しつつ検討・判断していた。次に、保育者たちは以下の2つの検討を行っていた。第1に、男女比や小学校区といった【クラス編成にかかわる考慮事項】を念頭に入れてクラス編成を行うことである。第2に、当該年度における【子どもたちの姿の見とり】と、それに伴う【子どもたちが遊びを楽しむためのクラス編成】である。しかし、両者は必ずしも新年度のクラス編成で一致するとは限らないことから、保育者たちは適宜【バランスの調整】を行っていた。最後に、バランスの調整を行ってもなお、新年度のクラス編成はどうしても完璧にはならないことから、最終的には【子どもたちを信じる】ことで、新年度のクラス編成の素案が決定されていた。

(1) 【クラス替え実施の有無】

クラス替えに先立って、保育者たちは各園の教育課程（例えば、集団としての育ち合いを大事にしたいため年長進級時のクラス替えは実施しない）や、受け持っている幼児たちの様子、また過去のクラス替えの有無による反省（例えば、「もっといろいろな大人とかかわる機会を設けたほうが良い」という話が出てからクラス替えを始めた等）に基づいて、〈クラス替え実施の有無〉それ自体を協議・判断していた。

(2) 【クラス編成にかかわる考慮事項】

保育者たちは新年度のクラスを新たに編成するにあたって、整えるべき考慮事項を有していた。この考慮事項は各園で異なっていたが、概ね以下のような内容であった。

第1に、〈小学校区の考慮〉〈バスコースの考慮〉〈男女比の考慮〉〈保育の利用時間の考慮〉〈誕生月の考慮〉〈新入園児の考慮〉である。それぞれの内容を考慮するかどうかは、各園の置かれた環境や、学年、また過去のクラス替えの経験に応じて判断されていた。

第2に、〈次年度の担任・副担任の考慮〉と、それに関連した〈特別な配慮を要する子どもの考慮〉および〈保護者対応の考慮〉である。例えば、園によっては3月のクラス替えを進めていく段階で、すでに次年度は新任保育者がクラス担任となることが周知されていることがあった。その周知を反映して、例えば対応の難しい保護者の幼児を経験歴の長い保育者のクラスに割り振ったり、反対に加配を要する幼児をあえて新任保育者のクラスに入れるなどして、担任・副担任のキャリアに応じた業務負担の配分・分散を行ったりしていた。

第3に、〈過去のクラス替えにおける反省の考慮〉である。園によっては、過去のクラス替えが上手くいかなかったという反省を考慮し、新年度のクラス編成の決め方を修正していた。

(3) 【子どもたちの姿の見とり】

上記の【クラス編成にかかわる考慮事項】は、各園が有していた、クラス替えを進める際の共通ルールのようなものであった。しかし、保育者たちはクラス替えにあたって、そのルールにのみ則って判断しているわけではなく、幼児たちに関する以下の3つの見とりを基にしながら、新年度のクラス編成を検討していた。

第1に、〈子ども一人ひとりの育ちの見とり〉である。まず保育者たちは、幼児たちが今年度末までにどんな育ちの軌跡を歩んできたか、また各幼児たちが現在抱えている課題を確認していた（例えば、年度末にかけて遊びや行動をどんどん起こしはじめた子、気持ち的におっとりしている子、まだ少し精神的に不安定な子など）。

第2に、〈旧クラスの仲間関係の見とり〉である。保育者たちは、旧クラスにおける幼児たちの仲間関係の様子とその課題を確認していた（例えば、一見仲良しだけれど、保育としては“あんまりよくない”幼児同士の関係性がある等）。

第3に、〈子ども-保育者〉関係の見とりである。素案決めを進めていた保育者たちは、幼児と特定の保育者との関係について、新年度もクラスと一緒にすべきか、それとも離すべきかを検討していた（例えば、ある幼児にとっては〇〇先生がいた方が日々の活動を楽しめるだろうと考える一方で、ある幼児には〇〇先生からの独り立ちを期待したい等）。

(4) 【子どもたちが遊びを楽しむためのクラス編成】

保育者たちは以上のような見とりをもとに、新しいクラスで安心して遊びを楽しみ、充実することができるように幼児たちを割り振っていた。その割り振りの方法は、内容に応じて大きく3つに分類された。

第1に、〈安心して生活していくための組み合わせ〉である。保育者たちは、年度末にかけて少し不安定になっている幼児や、特別な支援を要する幼児、また環境の変化が苦手な幼児などが、新年度も安心して生活できるように、仲良しの他児や保育者と、次年度もクラスと一緒にするように配慮していた。

第2に、〈新しい楽しみを見つけていくための組み合わせ〉である。保育者たちは、それまで特定の仲良しな友だちや保育者がいて、かつ独り立ちが可能であると判断される幼児については、その仲良しな友だちや保育者をあえて別のクラスに離して、一歩踏み出して新しい遊びの楽しさを見つけてもらえるように、新年度のクラスに割り振っていた。

第3に、〈遊びの質を高めていくための組み合わせ〉である。保育者たちは、クラス替えを通して遊びの質が高まっていくように、遊びを楽しめる幼児同士を一緒にしたり、ちょうど遊びが盛り上がってきている他クラスの幼児同士を同じクラスにしたりするように、新年度のクラスに幼児たちを割り振っていた。

(5) 【バランスの調整】

しかし、【子どもたちが遊びを楽しむためのクラス編成】は、必ずしも【クラス編成にかかわる考慮事項】に基づくクラス編成とは一致しない。新クラスのメンバー編成は、1人ずれると全ての案がずれてきたり、それでも「他に移すこともできない」幼児同士の組み合わせがあったりした。そのため保育者たちは、例えば学区やバスコースなどのバランスに、理想的なクラス編成をどうフィットさせるかという、〈理想と現実の調整〉に苦勞していた。

また、その際に保育者たちは〈左右されにくい子どもの調整〉として、どんなクラス編成でも比較的安定して遊んでいける幼児を配置しなおしたり、〈保育の標準時間外を見通した調整〉と

して「預かり保育で一緒になるからクラスでは離そう」等の判断により微修正したりして、より妥当な新年度クラスの家を探していた。また、双子などの場合、必要に応じて、保護者とクラス替えについて相談して共通理解を図る〈保護者との子ども理解の調整〉を実施する保育者もいた。

(6) 【子どもたちを信じる】

以上のような調整により、保育者たちは最終的な案を決定していったが、それゆえに新しいクラスの編成案は必ずしも「完璧」なものとはならない。そのため、ときに保育者たちは、本来は一緒にするべきではない幼児同士であっても次年度の成長を「信じて組ませよう」と考えたり、ある幼児の新しいクラスでみせる姿に不安があったとしても「君は成長のときだ」と考えたりするなどして、〈子どもたちの成長への信頼〉を抱き、新年度のクラス編成案を定めていた。そして最後に、保育者たちは、新年度の保育や幼児たちの姿をイメージしてクラス替えをしたとしても、実際には決して予想通りには進まないことを理解し、〈不確実性に身を委ねる〉ことで、期待と不安をもって新年度のクラス編成を決定していた。

(7) 総合考察および課題と展望

これまで保育におけるクラス替えは、幼児たちに仲間関係上の再適応を求める、環境移行の1つとして捉えられてきた。それに対して本研究は、クラス替えを、仲間関係をめぐる保育者の積極的な援助の1つとして捉え、その実践知を明らかにすることを目的とした。FGIによる調査および分析の結果、保育者たちは現実的な考慮事項を持ちつつも、新年度の保育のなかで、幼児たちが安心して、そしてさらに遊びを楽しんでいけることを企図しつつ、新しいクラスを編成しようとしていたことが示唆された。保育者たちにとってクラス替えは、幼児たちの仲間関係を維持したりほぐしたりすることで、保育の中心に位置づく、幼児たちの遊びを充実させていくための援助の1つであることが考えられた。

最後に、課題と展望を2点述べる。第1に、本研究はクラス替えをめぐる実践知の概要を把握すべく、学年等の制限を設けずに調査を実施し、その語りを分析に使用した。しかし、各カテゴリーからも見受けられるように、各学年に応じて、クラス替えをめぐる実践知の詳細は細部で異なってくるのが予想される。第2に、教育課程とクラス替えとの関係性についてである。分析結果からも示唆されるように、各園の教育課程に応じて、クラス替えの実施時期やその重み付けは異なってくるのが予想される。また、本研究の協力園はすべて横割りのクラス編成を実施していたが、異年齢の縦割りクラスを実施している園の場合、その実践知は異なってくることも予想される。さらなる詳細の検討については、今後の課題としたい。

<引用文献>

- 木下康仁. (2020). 定本 M-GTA : 実践の理論化をめざす質的研究方法論. 東京 : 金子書房.
- 小島康生. (2008). 進級によるクラス替えにともなう環境移行が幼稚園児の仲間関係に及ぼす影響 : 仲の良いお友達の存在が関係の広がりにもたらす効果とその個人差. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 8(1), 1-16.
- 桃枝智子. (2021). クラス替えを伴い進級した幼稚園年中児の仲間関係 : 旧成員との関係継続と新成員との関係生成. 質的心理学研究, 20, 114-132.
- 文部科学省. (2018). 幼稚園教育要領解説. 東京 : フレーベル館.
- 無藤 隆. (1997). 協同するからだとことば : 幼児の相互交渉の質的分析. 東京 : 金子書房.
- 佐藤正二. (2015). 実践! ソーシャルスキル教育 : 幼稚園・保育園. 東京 : 図書文化社.
- Slaughter, V., Imuta, K., Peterson, C. C., & Henry, J. D. (2015) Meta-analysis of theory of mind and peer popularity in the preschool and early school years. *Child Development*, 86, 1159-1174.
- 砂上史子. (2007). 幼稚園における幼児の仲間関係と物との結びつき : 幼児が「他の子どもと同じ物を持つ」ことに焦点を当てて. 質的心理学研究, 6, 6-24.
- 高櫻綾子. (2013). 幼児間の親密性 : 関係性と相互作用の共発達に関する質的考察. 東京 : 風間書房.
- Van der Wilt, F., Van der Veen, C., Van Kruistum, C., & Van Oers, B. (2018). Popular, rejected, neglected, controversial, or average: Do young children of different sociometric groups differ in their level of oral communicative competence?. *Social Development*, 27, 793-807.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 及川智博	4. 巻 70
2. 論文標題 仲間関係の変容をうながす保育者の援助の実践知：“ひとりぼっちの幼児”と“親密すぎる二者関係”を題材とした仮説モデルの生成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 48～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/jjep.70.48	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 及川智博	4. 巻 5
2. 論文標題 COVID-19感染拡大下の保育者に困難感を生じさせていた要因の検討：有事下の葛藤にみる保育の質の保障	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会保育実践研究	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 及川智博	4. 巻 16
2. 論文標題 保育をめぐる総合の理解から交渉の把握へ：小泉報告・中島報告・川田報告へのコメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学の研究と実践	6. 最初と最後の頁 88-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 廣戸健悟・柳岡開地・小山悠里・及川智博・森口佑介・坂上裕子
2. 発表標題 行動観察から読み解く乳幼児期の社会性の発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 及川智博
2. 発表標題 保育におけるクラス替えはどのように編成されているのか? : フォーカス・グループ・インタビューによる実践知の検討
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 及川智博・伊田勝憲・早川一穂・岡村由紀子・加藤利枝・常田美穂・河合隆平
2. 発表標題 COVID-19の感染拡大が私たちに問いかけるもの : 子どもと育ちあう社会へ進んでいくために
3. 学会等名 心理科学研究会2021年秋の研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 子どもたちの「日常」 : 地域研究から考える
2. 発表標題 及川智博・川田学・山下智也・道信良子・長津詩織・陳省仁・篠原岳司
3. 学会等名 日本発達心理学会国内研究交流委員会・北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター共同主催シンポジウム
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 近藤龍彰・浅川淳司・柳岡開地・神野雄・及川智博・榊原久直	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 心理学論文 解体新書 : 論文の読み方・まとめ方活用ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------